

コロナ禍のロシアに行く（上）

ERINA 調査研究部主任研究員
三村光弘

2021年10月7日～28日、ロシアを訪問した。今回の出張は、沿海地方での中口間の物流の現状の調査、モスクワでの北朝鮮専門家との意見交換、ダゲスタン共和国でのロシア・アゼルバイジャン間の物流や人流の現状と観光資源の調査であった。最後にハバロフスク地方とユダヤ自治州の中口国境地帯を回った。ロシアでの新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染状況が過去最悪を更新する中での訪問であった。今回は、このうち沿海地方での物流の現状について報告する。

ウラジオストク：極東連邦大学訪問と講演、中古車市場見学

ウラジオストクでは、極東連邦大学東洋学院（地域および国際関係学部）を訪問し、エフゲニー・ブストヴォイト学部長をはじめとする学部の教員たちとの交流を行った。その後、訪問の記念として学部学生と大学院生からなる聴衆に「ユーラシアにおける新たな国際秩序と朝鮮民主主義人民共和国」と題する講演を行った。

講演の内容は、筆者の最近の研究関心である、最近のユーラシアにおける中国の地域大国としての台頭が、朝鮮半島、特に北朝鮮にどのような影響を与えるのかを中心にして、米朝関係を基軸として考えられてきた朝鮮半島問題の解決のシナリオが、「一帯一路」をはじめとする中国の関与により、どのように変容しうるのかについて、あり得るシナリオを提示してみる、というものであった。北朝鮮、中国両国の国境から150キロほどのところに位置するウラジオストクだけあり、学生たちの関心は高く、質疑応答では学生たちと意見交換を行うことができた。担当の先生方の話では、極東連邦大学の学生は割合恥ずかしがり屋が多く、あまり質問をしない傾向に

あるが、今回の講演は学生の多くが関心を持っている分野であったので、質問が特に多かったとのことであった。

とは言え、ロシアの学生は初等、中等教育で自分の意見を言わせられる機会が多いせいか、質問やコメントを行う際に、数分間、そのまま文章になるような感じで話すことが出来る学生が多い。日本でも高校卒業までに、相手が相づちを打たなくても、5分程度は不安になることなく自分の意見をまとめて発表出来るような力がないとロシアの学生には太刀打ち出来ないと感じた。

講演の後、極東連邦大学の先生方に、ロシア最大と言われる中古車市場「ゼリョニ・ウゴル（Зелёный угол）」に連れて行ってもらった。すでに日本製中古車の流通はdrom.ruやjapancar.ruなど、オンラインがメインになっており¹、近いうちになくなると言われている同市場であるが、一時期はウラジオストクの一大産業ともなった中古車の集散地の名残を見ておきたかった。

写真1 ウラジオストクの中古車市場「ゼリョニ・ウゴル」に陳列されている日本製中古車



（出所）筆者撮影

実際に行ってみると、平日の午後のせいもあってか、客はまばらだった。陳列されている日本製の中古車は比較的新しいものも多く、見た目はきれいであった（写真1）。すでに全盛期は過ぎており、自動車販売だけでは商売にならないためか、日本製品を売っている雑貨屋が数軒あった。日本の酒類も露店で売られていると聞いて

いたが、COVID-19の感染拡大で日口間の人流が激減し、携行品として持ち込まれる商品が少なくなったせいか、あまり見かけなかった。

写真2 「ゼリョニ・ウゴル」にある日本製品を売っている雑貨屋



（出所）筆者撮影

写真2の店には、日本製の紙オムツやインスタントラーメン、清涼飲料水など多種多様な商品が売られていた。その多くには、ロシア語で書かれたラベルが貼られていなかったため、旅行者や船員などから仕入れた携行品として持ち込まれた日本製品がわずかながら流通していると感じた。

沿海地方の中口国境地帯の物流

筆者が訪問した10月上旬現在では、ロシアは中国からの留学生の受け入れをすでに再開し、極東連邦大学にも唯一航空路が復活しているモスクワを通じて留学生が到着しているとのことであった。中国に隣接するロシア極東では、物流は再開しているとのことであったが、どの程度復活しているのか。実際に見に行ってみることにした。

筆者が訪問したのは、黒竜江省東寧市と向かい合うポルタフカ、同級芬河市と向かい合うボグラニチニ、同密山市と向かい合うトゥリー・ログ、吉林省琿春市と向かい合うクラスキノの4か所だった。

ロシアは広い。沿海地方のこの4つの国

¹ 例えば、河尾基「ロシア極東の中古日本車市場：黄金時代の後に来るのは？」nippon.com、2013年：https://www.nippon.com/ja/currents/d10011/（最終アクセス2021年11月25日）を参照されたい。

境を回るだけで丸3日かかった。地図では近いように見えるが、ウラジオストクからポルタフカまでは160キロ、ポルタフカからボグラニチニまでさらに60キロ程度である。ハンカ湖畔のトゥリー・ログまでは270キロほどある。結局、1日の走行距離は平均で400キロほどになった。地方の道は空いてはいるが、路面状況がそれほどよくないところが多い。よい道路にはスピード監視用のカメラが設置されている。ロシア極東には高速道路はなく、一般的には市街地で50キロ、市外で90キロが一般的な制限速度となる（それ以上出せる道路もあるし、市内では40キロや30キロ制限もある）。制限速度より20キロ以上オーバーすると撮影されて反則金が請求されるとのことであった。

ウラジオストクからウスリースクまでは2012年のアジア太平洋経済協力(APEC)首脳会議の際に片側2車線の道路に改修され、路面状況は沿海地方では最もよい。しかしカメラも最も多い。交通量も新潟周辺のバイパスほどではないにせよ多く、ロシア極東では比較的人口密度の高い地域であることが分かる。ウスリースクからポルタフカまでは、街から離れれば離れるほど道路状況は悪くなり、段差や大きな穴に注意しながらの運転となる。初めは緊張したが、1時間も走っていると、路面の状況に自然と気が回るようになる。街を出ると村を通過する時を除き、歩行者はほとんどいないので、路面状況に神経を使うことが出来る。逆に、村の中を通るときには、歩行者優先なので、相当徐行する必要がある。

ポルタフカは国境検問所の入り口の近くにトラックステーションがあり、多くのトラックが止まっていた。ウスリースクからポルタフカまでにすれ違った大型トラックは10台弱で、物流がそれほど円滑には流れていないことが見て取れた。

写真3 ポルタフカの村はずれにある戦没者慰霊碑



(出所) 筆者撮影

ロシアのどこに行ってもあるが、ポルタフカにも第2次世界大戦時の戦没者の慰霊碑がある(写真3)。当時はソ連と満州国の国境であった東の最前線とも言えるポルタフカからも、欧州に多くの兵士が送られていったようである。

写真4 ポルタフカから中国を望む。向こうの山は中国



(出所) 筆者撮影

普段は中ロを行き交うトラックやバスで賑わうポルタフカであるが、COVID-19の影響を受け、閑散としていた(写真4、5)。

写真5 ボグラニチニからウスリースク方面に向かう大型トラック



(出所) 筆者撮影

ボグラニチニは、1901年の東清鉄道の開通以来、ロシアと中国の国境として機能してきた。鉄道と道路両方の国境があり、鉄道はCOVID-19の影響で往来が途絶える前には、中国の綏芬河からグロデコボまで、1日1本の旅客列車も走っていた。グロデコボ駅は、沿海地方を対象とした電子ビザの入国地点でもあった。貨物列車は引き続き走り、それなりの物流量があるようだ。国境に向かう道には、数十台のトラックが並んで順番待ちをしていた(写真6)。

写真6 トゥリー・ログの税関前で待つトラック



(出所) 筆者撮影

ハンカ湖畔にあるトゥリー・ログは、小さな村であるが、中国の密山市と向かい合う税関がある。税関へと向かう道には、木材(板材)を積んだトラックが50台ほど止まっていた。

写真7 クラスキノの街にある道路標識



(出所) 筆者撮影

吉林省琿春市と向かい合うクラスキノにも行ってみた。クラスキノでは中国国境に行く道と、北朝鮮国境のハサンに行く道が分岐している(写真7)。ハサンの国境は鉄道橋しかないで、旅客、貨物とも鉄道で移動することになる。北朝鮮が現在、特別防疫体制でロシアとの国境を閉じているので、北朝鮮との物流、人流は停止している。

クラスキノの街から中国国境に隣接する税関までは28キロほどあるが、街と税関の間に5~6キロにわたり、100台以上の大型トラックやトレーラーが順番待ちをしていた(写真8)。海産物とおぼしい冷凍トラックやリーファーコンテナも散見され、コンテナに発電機を接続して冷凍状態を維持しながら、トラクターヘッドはどこかに行ってしまったものも少なくなかった。

写真8 クラスキノ税関前に並ぶトラックの列



(出所) 筆者撮影

ロシア側のCOVID-19の感染者数が中国と比べると明らかに多いため、中国側がロシア側のトラックの受け入れ制限をしているのと、ロシア側の事情で中国側

のトラックがロシアには入ってこないことが相まって、中口間の道路での物流は相当滞っている印象であった。順番待ちをしている運転手たちも、時間つぶしをしているというよりは、その場で生活をしている感じであり、何日も待たないといけない状況であることが見て取れた。それでも沿海地方においては中国との物流が何とか維持されているところを見ると、冷戦期には対立が激しかった中国東北とロシア極東の経済が相互依存関係にあることを強く感じた。

今回、ロシア極東も COVID-19 の感染が広まり、モスクワ市とハバロフスク地方は、日本帰国前14日間に訪問した場合、帰国後3日間の検疫所指定施設での待機が求められる地域となっていた。しかし、ウラジオストクの大学ではマスクをするのは基本的に教室の中だけで、敷地内にいる間ずっとマスクを着けているのは教職員だけであった。市内でも屋外ではマスクを着用している人を見つけるのが難しいほどで、屋内での着用率が半分程度、そしてその多くが鼻や口が見えているような

装着方法であった。感染者も死者も少なかった2021年3月に訪問したときの方がマスクを着けている人の割合が多く、人々はすでに COVID-19 に慣れた感じであった。この傾向は、今回訪問したすべての地域でそうであったので、おそらくロシアは全般的にそのような傾向になるのではないかと思う。

今回は、モスクワとダゲスタン共和国、ハバロフスク地方、ユダヤ人自治州の訪問について報告しようと思う。